

人の可能性を感じ、共生社会を考える大会に!

# 田口 亜希

Aki Taguchi  
小94・大手前中高37期

かつて射撃選手として3度のパラリンピックに出場し、東京2020では組織委員会アスリート委員を務め、日本オリンピック委員会(JOC)理事にも就任された田口亜希さん(旧姓:寺井)が、今年開催されたパラリンピック、そしてこれからのパラスポーツについてお話してくださいました。

**田口さんは2016年大会の招致からオリンピック・パラリンピックの活動に関わっていらっしゃいました。どのような思いで活動されてきたのですか。**

私は25歳の時に病気で車いす生活となりました。自分自身で何もできなくなり、最初は本当に情けなく落ち込みました。そこからたくさんの方に支えていただき、パラリンピックに出場できました。皆さんの支え、応援に、人はなんて素晴らしいんだろうと感じました。

人は一人では生きていけない、これまでも様々な方々に支えられていたんだと感じました。だからこそ、自身も誰かの役に立ちたい、誰かを支えたいと思いました。

**東京2020が実際に東京で開催され、国内が盛り上がる様子をご覧になられて、どのような感想、お気持ちを抱かれましたか。**

1年延期となり、開催が危ぶまれる中でも、開催を信じて工夫しながら練習を続け、コンディションを維持した全ての選手の活躍は、見ていて本当に嬉しかったです。また、コロナ禍の中、たくさんの方々のご尽力・ご理解で東京大会が開催されたことに、感謝の気持ちでいっぱいになりました。



また、日本語のルール説明や解説があり、たくさんの方がパラスポーツを知ってくださったことは嬉しかったですし、自国開催ならではの良さを感じました。

**今後、パラリンピックがどのようなイベントになってほしいとお考えですか。**

たくさんの方がパラリンピックを観て、スポーツとして楽しみ、また選手が自身の機能を最大限に生かし、創意工夫して競技を行っている姿を見て、人間の可能性を感じていただけたと思います。今後もパラリンピックは開催され続けます。スポーツとしてだけでなく、共生社会などを一緒に考える大会にしていきたいです。

**追手門学院大手前中高在学中の思い出や、いまの在校生や若い卒業生たちに伝えたいことがあれば、教えてください。**

高校一年生の時に海外研修でオレゴンに行きました。その際、特に子供たちとうまくコミュニケーションが取れなかったことがとっても悔しく、英語を喋れるようになりたと思いました。帰国後は外国人教師マーチン先生のところへ授業以外の時間も話をしに行っていました。

英語を使う職業につきたくて、外航クルーズ客船飛鳥のパイラーになりました。その後も、海外遠征に行った際など英語は役に立っています。私の場合は英語でしたが、何かをやりたいと思ったら、まずは目の前のことから始めれば、きっと大きな夢や目標につながると思います。

